

接頭辞「小/大」の副詞修飾的解釈と Root 仮説

田 川 拓 海

1. はじめに

本稿では、接頭辞「小/大」が動詞に付加した場合に、様態修飾解釈、結果修飾解釈、量修飾解釈の三種類が観察され、それが動作/状態変化という動詞句の性質と対応していることを明らかにする。さらに、分散形態論を用いた語形成に対する統語論的アプローチを導入することによってそれらの解釈が出現する過程を分析する。具体的には、Harley (2005) で提案された 1) 語彙的要素を $\sqrt{\quad}$ という小さな要素から組み上げ、2) その $\sqrt{\quad}$ に manner, state といった意味論的タイプを設定すると仮定する、言わば統語的語彙分解の理論と、田川 (2007) で提案された「 $\sqrt{\quad}$ に直接付加する接頭辞」という考え方を用いれば、上述の現象が説明されることを示す。

1.1 分析の対象：接頭辞「小/大」

接頭辞「小 (ko)/大 (oo)」¹は、名詞に付加しその大きさや量などを修飾することができる一方、動詞連用形に付加することもできる²。

- (1) a. 名詞：小顔，小魚，大男，大雨，…
- b. 動詞：小走り，小売り，大笑い，大崩れ，…

本稿では、これらの接頭辞が副詞的な意味を表す現象に焦点を当てるために、「小/大+動詞連用形+する」という組み合わせが可能な場合、すなわち「小/大」が動詞述語の表す出来事に直接関与する場合の解釈について考察する³。

中には、次に示すように、形としては「小/大+動詞連用形」という組み合わせであっても「する」と組み合わせると動詞として用いることができないものも存在する。

- (2) a. 小：小刻み，小競り合い，小遣い，小作り，小降り，小振り，小

回り, 小止み, …

- b. 大: 大商い, 大有り, 大急ぎ, 大入り, 大写し, 大掛かり, 大きくくり, …

(2a, b) のような場合に「小/大」がどのような解釈を持ち, それが本稿で取り扱う副詞的修飾の分析とどのように関連しているのか, という点については本稿の射程を越えるので稿を改めて論じることとしたいが, 3.4 節でその可能性について少しだけ述べる⁴. また, このように同じ接頭辞が同じ語彙範疇に付加した場合でも結果として異なる範疇を派生する, という現象の分析については田川 (2007) を参照されたい.

1.2 「小/大」による副詞的修飾と三つの解釈

1.1 で述べた, 「小/大+動詞連用形+する」という形式が可能な組み合わせにはおおよそ次のようなものがある.

- (3) a. 小: 小走りする, 小売りする, 小書きする, 小切りする, 小太りする, 小分けする, 小割りする, …
 b. 大: 大振りする, 大笑いする, 大暴れする, 大売れする, 大崩れする, 大負けする, 大もうけする, 大荒れする, 大喜びする, 大騒ぎする, 大回りする, …

これからその意味について詳しく見ていくが, 大まかには「小/大」はその形式によって表される出来事をいわば副詞的に修飾していると言えよう. そして, 出来事におけるどの要素を修飾しているのかという点について詳しく見ると, 次のような三つのタイプに分けることができる.

まず, 例えば「小走りする」は「小股で走る」という意味になるが, これは「小さな動作で走る」ということである. また, 「大振りする」はおおよそ「大きく振る」と言い換えられることからわかるように, 「大」は動作の様態を修飾している. このようなタイプを「様態修飾解釈」と呼ぶこととする.

- (4) 様態修飾解釈: 小走りする, 大振りする, 大笑いする, 大暴れする, 大喜びする, 大騒ぎする, 大荒れする,
 a. 小走りする: 小さな動作 (小股) で走る

b. 大振りする：大きな動作で振る

次に、「小分けする」を考えてみる。この場合は、(4)のタイプのように「分けるという動作における何らかの様態が小さい」という解釈にはならず、「小さな単位に分ける」というような意味になる。このようなタイプを「結果修飾解釈」と名付ける。

- (5) 結果修飾解釈：小分けする，小割りする，小書きする，小切りする，
- a. 小分けする：小さな単位に分ける / *小さな動作で分ける
 - b. 小割りする：小さな単位に割る / *小さな動作で割る

また、上述した二つのどちらにも属さない解釈を持つものがあり、例えば「大崩れする」などがこれに属すると考えられる。「大崩れする」のような例では「崩れる過程の様態が派手だ」というような様態修飾解釈にも「何かが崩れた結果大きくなる」という結果修飾解釈にもならず、おおよそ「崩れた量が大きい」というような意味になる。このタイプを「量修飾解釈」と呼ぶこととする。

- (6) 量修飾解釈：大崩れする，小太りする，大儲けする，大売れする，大回りする，
- a. 大崩れする：崩れる量が大きい / *崩れる様態が派手だ / *崩れた結果大きくなる
 - b. 小太りする：太る量が小さい / *太り方が地味だ / *太った結果小さくなる

さらに、これらの三つの解釈の可能性は「小/大」が付加する動詞句の性質と次のように結びついているようである⁵。

- (7) a. 様態修飾解釈：動作動詞句
b. 結果修飾解釈，量解釈：状態変化動詞句

本稿では、この「小/大」という接頭辞がその付加する動詞の性質によってその解釈に違いを見せるという現象が統語論的な語形成の理論、特に(7)に見られるような動詞句の性質を統語構造に反映させる、統語的語彙分解 (lexical

decomposition in syntax) と呼ぶことのできるアプローチを導入することによって分析され得るということを示す。

2. 理論の導入

2.1 分散形態論 (Distributed Morphology)

本稿では分散形態論 (Distributed Morphology : (Halle and Marantz 1993 など⁶⁾) において提案されている, 語形成への統語論的アプローチを採用する. 具体的には, 下記の2つの仮説が重要である.

(8) 単一動力仮説 (Single Engine Hypothesis)

いかなる要素であっても, 何かを“組み合わせる”操作は, 全て統語部門 (syntax) で行われる. 統語部門と独立した, 語形成が行われる部門は存在しない (Marantz 1997, 2001, Embick and Noyer 2007 等).

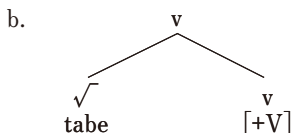
これは, 語形成も基本的には統語論の原理に従って統語部門で行われるという考え方である.

(9) Root 仮説 (Root Hypothesis)

いわゆる語彙範疇 (V, N, A…) は, 要素自体にもともと指定されているのではなく, 範疇未指定の要素, “ $\sqrt{\quad}$ (Root)” に対して, 統語部門における指定がなされることによって決定される (Marantz 1997, 2001, Arad 2003, Harley 2005, Acquaviva 2009 等).

これはつまり, 動詞, 名詞, 形容詞なども統語的原子 (syntactic atom) としてその性質が指定された状態で統語部門に挿入されるのではなく, 統語部門において形成されるものであると考えるということである. 簡単な例を次に示す.

(10) a. 動詞「食べ」の構造



2.2 統語的語彙分解と√の種類

Harley (2005) は Hale and Keyser (1993, 2002) の研究を基に、動詞句のいわゆる語彙的アスペクト（動作、状態、状態変化など）を 2.1 で導入した√の性質とそれらが形成する構造から直接導き出すアプローチを提案している。

- (11) Harley (2005) における√の種類
- a. Event: hop, kick, push, …
 - b. Thing: foal, water, butter, …
 - c. State: flat, rough, clear, …

対応している√の種類からも推測できるように、Eventの√からは動作動詞句が、Stateの√からは状態変化動詞句が形成される。さらに、√自身の意味論的性質として bounded/unbounded の区別を導入することによって、各√から形成される動詞句の telicity が予測されると主張されている。

本稿ではさらに、Erteschik-Shir and Rapoport (2005) を参考に、動作動詞句を形成する√としては“Event”より“Manner”という概念が妥当だと考え、√の種類とそれに対応する日本語の語彙項目 (Lexical Item) の対応関係を次のように仮定しておく⁸。

- (12) a. Manner: oyog, hasir, nagur, ker, …
b. State: nur, koware, yabure, toke, …

3. 分析

3.1 √に付加する接頭辞

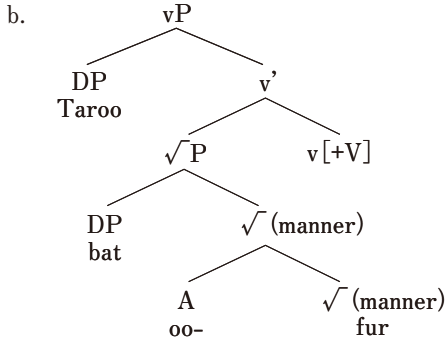
2 で導入した理論と、田川 (2007) で示された次の主張を仮定すれば、副詞的接頭辞「小/大」が見せる解釈の違いはその統語構造と√の意味論から自動的に導き出すことができる。

- (13) 「不」や「小」などのある種の接頭辞は統語構造において√に直接付加している (田川 2007)。

動作動詞句に「小/大」が現れた場合の統語構造は次のようになる⁹。この構

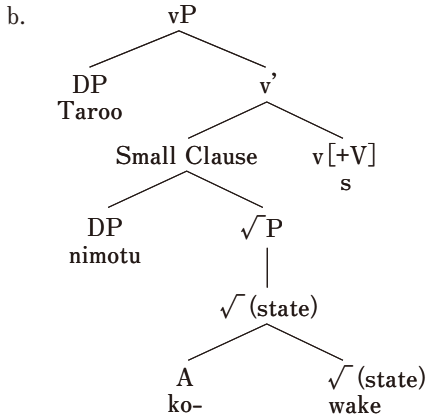
造では「大」が“Manner (様態)”の部分の直接修飾している。従って、Mannerの $\sqrt{\quad}$ から形成される動作動詞句に「小/大」が現れている場合には様態修飾解釈が得られることになる。

(14) a. 太郎がバットを大振りした。



次に、状態変化動詞句に「小/大」が現れる場合の構造を見る。

(15) a. 太郎が荷物を小分けした。



ここでは、「小」が動詞句の中に含まれる“State (状態)”の部分の直接修飾している。この $\sqrt{\quad}$ wakeの部分はおよそ“divided”のような意味を表すと考えられるので、それに「小」が付加した場合は「小さく分けられた状態」とい

う結果修飾解釈が導き出される。

すなわち、「小/大」自体は常に同じ統語的位置に現れ、同一の統語的対象(=√)を修飾するのであるが、その√自身の性質の違いによって異なった解釈が派生されるのである。この分析の利点は、修飾要素と被修飾要素の関係を構造から直接捉えることができる、というところにある。仮に「小/大」が例えば動詞(句)に付加すると考えると、動詞が「動作」と「変化」など複数の意味要素を含んでいる場合に、どのような解釈が得られるか上手く予測することができない。

3.2 結果修飾と量修飾

では、同じ状態変化動詞句でも、(7)にまとめたように結果修飾解釈と量修飾解釈が出てくるのはどのように捉えられるであろうか。

本稿では、この解釈の違いは統語構造の違いに起因するのではなく、意味論的な問題であると考えている。各√と結果として生じる意味の対応関係を次に示す。

- (16) a. ko-+√wake: “小さく分けられた状態”
 b. ko-+√futor: “少し太った状態”
 c. oo-+√mooke: “(お金などが)大きく有る状態”
 d. oo-+√kuzure: “大きく崩れた状態”

ここではそれぞれ、√と接辞の意味の相互作用によって個々にその解釈が決定されているのではないだろうか。例えば“太った結果小さくなる”とか、“(がけなどが)崩れた結果大きくなる”といった状況は百科事典的知識に照らし合わせるとありえない出来事なので、双方とも結果修飾解釈は取り得ない、などと考えることができる。

この点に関しては、井本(2004)が参考になる。井本(2004)で示されたように、副詞「小さく/大きく」も共起する位置/状態変化動詞の語彙意味論的タイプによっていくつかの解釈が存在する。

- (17) a. 風呂敷を大きく広げた: 結果修飾解釈
 b. 針金を大きく曲げた: 量修飾解釈

副詞の接頭辞「小/大」に関しても、それが修飾する√の語彙意味論的性質や上で述べた百科事典的知識との整合性などから結果修飾解釈か量修飾解釈かが決まるのではないかと考えられる¹⁰。本稿で採用している分散形態論では語形成を辞書部門 (Lexicon) ではなく統語部門で直接取り扱うので、井本 (2004) のような句レベルの現象についての研究を直接取り入れることができる¹¹。しかし、現時点では例えばどのような語彙項目と「小/大」が組み合わさった場合に結果解釈/量解釈のどちらになるのか、体系的な説明を可能にする意味論的枠組みを提示することはできていない。この点については今後の課題としたい¹²。

本稿で重要なのは、上で示した統語的分析から、「小/大」が√stateに付加する場合は「変化」に関わる二つの側面のいずれかを修飾するということが予測できる、ということである。

3.3 語彙概念構造を用いたアプローチとの比較

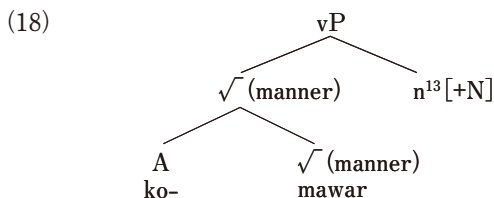
接辞が複数の解釈につながる現象への分析としては、すでに影山・由本 (1997) や伊藤・杉岡 (2002) で提唱されているような語彙概念構造によるアプローチがあるが、その枠組みでは本稿で示した「小/大」に関する事実、特に様態修飾解釈とそれ以外の二つの解釈が存在すること、を上手く捉えることはできないと推測される。なぜなら、語彙概念構造による分析においては、それぞれの解釈を導き出すために「小/大」が動作の様態に関わる意味述語 (“ACT”) や変化に関わる意味述語 (“BECOME”, “AT_[state] z”) を修飾すると仮定しなければならないが、「ではなぜその場合はその意味述語に付加するのか」という点に関しての説明を語彙意味論の理論だけでは説明できないと考えられるからである。例えば、様態修飾解釈の場合は「小/大」の概念構造は“ACT”を修飾し、結果修飾解釈の場合は“AT_[state] z”を修飾している、とするだけでは、ほぼ現象をそのまま概念構造で書き表しているだけで、「なぜそのような解釈になるのか」という分析を与えることはできないであろう。

一方、本稿の分析ではその点について「小/大」は常に統語的に同一の要素、すなわち√に付加していて、その√の種類が異なることによってそれぞれの解釈が現れる」という明示的な分析を与えることができる。さらに、その「√に付加している」という仮定は本稿において取り扱っている現象を分析するためだけに提案されたものではなく、接辞とそれが引き起こす範疇変化という独立した現象から導き出されたものである (田川 2007) という点が重要である。

3.4 副詞的修飾以外への適用

また、本稿の√への直接付加分析の利点として、(2)で挙げたような、「する」と組み合わせて動詞述語を形成することができない要素へもそのまま敷衍することができる、という可能性を挙げることができる。なぜなら、「小/大」と√の組み合わせそのものはそれより構造的に上位にある語彙範疇を決定する要素に左右されないからである。

例えば、名詞「小回り」の表す意味はおおよそ「小さい半径で回ること」であり、様態修飾解釈の「小走り（小股で走る）」に似ていると感じられるが、その意味は次のような構造によって捉えることができる。



もちろん、「小/大」が付加する全ての語の意味が本稿で仮定した少数の√の種類で捉えられるかどうかは詳しく検討してみなければならないが、接辞とそれが付加する要素の修飾関係について範疇を超えて分析するモデルを提案することができる可能性がある。

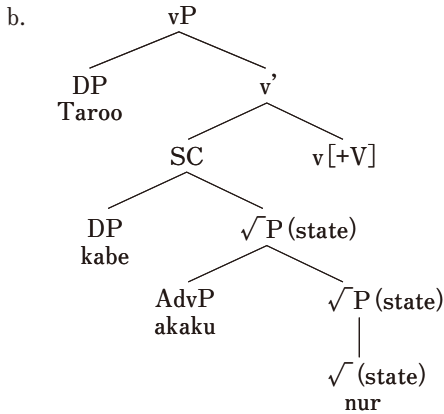
4. その他の現象への応用：結果副詞としての結果二次述部

本稿の、√を用い動詞句にその意味と対応した精密な構造を仮定するアプローチは、さらに日本語の結果構文を巡るいくつかの特徴をまとめて捉えることができる可能性がある。

まず、日本語の結果構文では、英語などと異なり動詞の語彙の意味と強く結びついた結果述語しか許されることが知られている (Washio 1997)。

この事実は、本稿で提示した構造を用い、「結果述語は√Pに直接付加する」と仮定することで捉えることができる。次にその構造を示す。

(19) a. 太郎が壁を赤く塗った。



この構造は、 $\sqrt{\text{nur}}$ の部分が直接「赤い」という修飾を受けているということを表している。すなわち、 $\sqrt{\text{P}}$ の段階でおおよそ「赤く塗られた状態」というような意味を構成しており、その $\sqrt{\text{P}}$ 全体と目的語名詞句が叙述(predication)の関係を持つ¹⁴。この結果述語と $\sqrt{\text{P}}$ の統語的關係は、様態副詞(付加詞)とそれが付加する動詞句の統語的關係などと全く同じであり、両者に見られる強い選択関係を同じように取り扱うことができる。すなわち、「*車をべちゃんこに蹴った」が不可能なのは、「*車が熱心に壊れた」が不可能なのと同じように、副詞とそれが修飾する要素の選択関係という観点から捉えることが可能になるのである¹⁵。

また、この構造は結果述語が句レベルの統語的要素に付加するという点で「副詞(的)」であるという特徴も、結果述語(句)と目的語名詞句が叙述関係にあるという特徴も両方実現している。結果述語はこれまでいわゆる日本語学と呼ばれる研究領域では「副詞」として、日本語生成文法の研究領域では「(二次)述部」として捉えられることがあったが、本稿で提案する(19)の構造によって、その両側面を両立させることが技術的に可能になっている。

この分析が日本語の結果構文や副詞の研究について、あるいは他言語との対照という点において、これまでの分析とどのような予測の違いや新しい経験的議論を提供することができるのか、という点については今後の課題としたい¹⁶。

5. おわりに

本稿では、様々な要素に付加する接頭辞「小/大」が動詞に付いた場合に異なった種類の解釈を見せるという現象について指摘した。さらに、それらの現象が分散形態論という理論を導入し、1) (接辞付加による) 語形成を直接統語理論で取り扱い、2) 語彙的要素のさらに元になるものとして√という要素を導入し、3) その√にいくつかの意味論的タイプを認める、と仮定することによって捉えられることを示した。

5.1 課題：Rootの解釈

Rootに意味的なタイプを設けるというHarley (2005) の提案は、分析の道具立てとしては有効であるが、そもそもRootという概念の位置付けを考えると問題が生じる。Rootにあまりに豊かな内容を持たせると、分散形態論や統語的語彙分解が批判するいわゆる語彙主義的モデルにおける語彙範疇と実質的に変わらなくなってってしまうからである¹⁷。

解決方法としては、mannerやstateといった性質を、Root自身が持つ情報ではなく、Rootが受ける解釈であるとする可能性が考えられる。統語的語彙分解のモデルでは動詞句の種類ごとに統語構造が異なるので、変化動詞句に含まれるRootはstateの解釈を受ける、動作動詞句に含まれるRootはmannerの解釈を受ける、といったような分析が可能である¹⁸。このようにすれば、Root自身が持つ内容を豊かにし過ぎずに本稿で提案した分析を維持することができるが、具体的な分析、他の研究との関連・影響、モデル全体の検証については稿を改めて論じることとしたい。

謝辞

本稿は2008年度に筑波大学大学院人文社会科学研究科に提出した博士学位請求論文「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究」の一部に加筆・修正を行ったものである。また、草稿の段階で島田雅晴氏より重要なご指摘をいただいた。記して感謝したい。本稿における不備や誤りはすべて筆者の責任である。

本研究の一部は、日本学術振興会科研費「屈折・派生形態論の融合のための分散形態論を用いた日本語の活用・語構成の研究」(若手研究(B), 平成25年度～平成26年度, 研究代表者: 田川拓海, 課題番号25770171), 同じく科

研費「分散形態論を用いた日本語の時・法と語性の形式的研究」(平成27年度～平成29年度, 研究代表者: 田川拓海, 課題番号15K16758)による援助を受けている。

参考文献

- Acquaviva, Paolo (2009) Roots and lexicality in Distributed Morphology. *York Paper in Linguistics* 10. pp.1-21.
- Alexiadou, Artemis (1999) . Remarks on the syntax of process nominals: An ergative pattern in nominative-accusative languages. *Proceedings of North East Linguistic Society* 29. pp.1-15.
- Arad, Maya (2003) Locality constraints on the interpretation of roots: the case of Hebrew denominal verbs. *Natural Language & Linguistic Theory* 21. pp.737-778.
- Baker, Mark C. (2003) *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge University Press.
- Embick, David (2012) Roots and features (an acategorial postscript). *Theoretical Linguistics* 38. pp.73-89.
- Embick, David and Rolf Noyer (2001) Movement operations after syntax. *Linguistic Inquiry* 32. pp.555-595.
- Embick, David and Rolf Noyer (2007) Distributed Morphology and the syntax/morphology interface. Gillian Ramchand and Charles Reiss (eds.), *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*. pp.289-324, Oxford University Press.
- Erteschik-Shir, Nomi and Tova Rapoport (2005) Path Predicates. Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.), *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*. pp.65-86. Oxford University Press.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. MIT Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (1993) On the syntax of arguments and the lexical expression of syntactic relations. Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*. pp.53-109. MIT Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a Theory of Argument Structure*. MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed Morphology and the pieces of inflection. Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The view from building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*. pp.111-176. MIT Press.
- Halle, Morris and Alec Marantz (1994) Some key features of Distributed Morphology. *MITWPL* 21. pp.275-288.
- Harley, Heidi (2005) How do verbs get their names?: Denominal verbs, manner incorporation, and the ontology of verb roots in English. Nomi Erteschik-Shir and Tova Rapoport (eds.) *The Syntax of Aspect: Deriving Thematic and Aspectual Interpretation*. pp.42-64. Oxford University Press.

- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1999) Distributed Morphology. *Glott International* 4-4. pp.3-9.
- Harley, Heidi (2014) "On the Identity of Roots," *Theoretical Linguistics* 40. pp.225-276.
- Harley, Heidi and Rolf Noyer (2000) Formal versus encyclopedic properties of vocabulary: Evidence from nominalizations. Bert Peeters (ed.), *The Lexicon/Encyclopaedia Interface*. pp.349-374. Elsevier Press.
- 井本亮 (2004) 「状態変化と副詞的修飾」現代日本語文法研究会 (編) 『現代日本語文法における現象と理論のインタラクション』 pp.41-59.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社.
- Kratzer, Angelika (1996) Severing the external argument from its verb. Johann Rooryck and Laurie Zaring (eds.), *Phrase Structure and the Lexicon*. pp.109-137. Kluwer.
- Marantz, Alec (1997) No escape from syntax: don't try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon. *UPenn Working paper in Linguistics* 4(2). pp.201-225.
- Marantz, Alec (2001) Words. at *West Coast Conference on Formal Linguistics*. Santa Barbara.
- 森田順也 (2005) 「派生名詞表現の分析—分散形態論の見方—」大石強・西原哲雄・豊島庸二編 『現代形態論の潮流』 pp.35-54.
- 西山國雄 (2013) 「分散形態論」『レキシコンフォーラム No.6』 pp.303-326, ひつじ書房.
- 田川拓海 (2005) 「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」『筑波応用言語学研究』 12, pp.71-84.
- 田川拓海 (2007) 「二種類の範疇変化とその構造的定義：否定の接頭辞と右側主要部の規則」『言語学論叢』 26, pp.1-15.
- 高橋勝忠 (2015) 「接頭辞「大」について」西原哲雄・田中真一編 『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』 pp.61-77, 開拓社.
- Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6. pp.1-49.

注

- 1 漢語接頭辞「小 (syoo)」 「大 (dai)」 も同表記を取るが、付加できる要素に違いがあるなど簡単に一緒にはできないため、本稿では取り上げない。「大 (dai)」の形態論的、統語論的分析については高橋 (2015) を参照されたい。
- 2 「小」は形容詞にも付加することができる。
 - a) 小暗い, 小ざかしい, 小うるさい, 小汚い, …
 一方で、「大」は名詞あるいは動詞にしか付くことができない (高橋 (2015) : 62).
- 3 動詞に「小/大」が付加した場合になぜ「小/大+連用形+する」という形式に

なるのか、という点については田川 (2005) を参照されたい。

- 4 接頭辞「小/大」が付加できる動詞の数はそれほど多いわけではない。たとえば「小走りする」に対して「小歩きする」が基本的に許容されないことはしばしば「語彙的欠落 (lexical gap)」等と呼ばれ、その形成が統語部門ではなく語彙部門あるいは辞書部門 (Lexicon) で行われているとみなす基準の1つとされることがある。しかし、明らかに句レベルのものを含む場合でもこのように予測される表現を欠くということはある、たとえば句イディオムなどがそうである (「花を持たせる」に対して、「花を持つ」はイディオムの意味を持たない、など)。本稿で採用する分散形態論は語形成も基本的にはすべて統語部門で行われるという強い仮定を置いているが、このように従来「語彙的」とであるとされることが多かった特徴がどのように捉え直されるのかという点についてはまだそれほど研究が進んでいるとは言えない。今後の課題としたい。
- 5 (7b) については、さらに「結果修飾解釈は主体動作、客体変化の他動詞と結びつきやすく、量解釈は主体変化の自動詞と結びつきやすい」という一般化をすることができるが、本稿で提案する統語論的分析についてはこの区別は重要ではない。また、記述の便宜上結果修飾解釈と量解釈を別としているが、1つのメカニズムから得られる解釈の2つの側面であるという可能性がある。詳しくは3.2節で述べる。
- 6 分散形態論における全体的な文法のモデルなどについてはHalle and Marantz (1993, 1994), Harley and Noyer (1999), Embick and Noyer (2001, 2007)などを参照されたい。
- 7 形態論における単位である「語根 (root)」とは基本的に異なる概念であり、しばしば記号“ $\sqrt{\quad}$ ”によって表示される。
- 8 “Thing”の $\sqrt{\quad}$ も存在するが、本稿の議論には関わらないので割愛する。
- 9 「小/大」の範疇表示を“A”としたのは、モノに付加した場合は形容詞的修飾をし、コトに付加した場合は副詞的修飾をしているように考えられるからである。形容詞と副詞の統語的類似性についてはBaker (2003)などを参照されたい。また、ここでの“v”は動作主を導入する機能範疇 (Kratzer 1996 など)と動詞の範疇を決定する機能範疇を兼ねているが、厳密には両者は区別される (西山 2013)。このような接辞付加が起こると $\sqrt{\quad}$ が上部にある機能範疇に移動できなくなり、vにある [+V] の素性が“s”, すなわち「する」として具現すると考える (田川 2005)。
- 10 島田雅晴氏より、結果修飾解釈と量解釈は合わせて様態修飾解釈と対立しており、Grimshaw (1990) が結果名詞を result nominal と simple event nominal に分類したことと並行的ではないかという指摘を受けた。ここでの分析でも示唆しているように、結果修飾解釈と量解釈がたとえば「状態変化修飾解釈」とでも呼べる解釈の下位分類であるという可能性は大いにあり、また結果修飾解釈の分析は result nominal の分析と親和性が高いと思われる (cf. Alexiadou 1999)。一方で量解釈と simple event nominal の平行性についてはさらなる検討が必要だと考えられる。日本語の研究における simple event nominal の位置付けについては影山 (1993) 以降もそれほど進展を見せていないように見受けられるが、本稿における議論が新たな知見をもたらしうるのかという点については改めて検討したい。

- 11 分散形態論の全体的な文法モデルと、その中での（語彙）意味論に関する部門の取り扱いについては、Harley and Noyer (2000), 森田 (2005) などを参照されたい。簡潔に述べると、いわゆる語彙意味論で取り扱われるような語彙項目の性質も、イディオムに関するような句レベルの意味論の情報も、様々な言語表現に関する百科事典的知識も、Encyclopediaと呼ばれる一つの部門に貯蔵され、取り扱われると考えられている。
- 12 (7) の直後で述べた「結果修飾解釈は主体動作、客体変化の他動詞と結びつきやすく、量解釈は主体変化の自動詞と結びつきやすい」という一般化から「外項の有無」という点に着目し、さらに統語論的な説明を推し進める可能性も存在する。しかし、「外項の有無」という特徴と「結果」や「量」という概念を統語論的に結びつけるのは現時点ではかなり困難であると考えられる。
- 13 n は名詞性を決定する機能範疇である (Marantz 2001)。
- 14 叙述関係はこの構造においては Small Clause によって保証される。
- 15 もちろん、同じように捉えられるのは「選択制限を満たしていない」という点までであって、「どのように選択制限に合っていないか」という点では違いがあり、その点についてはさらに（語彙）意味論的分析が必要となる。
- 16 島田雅晴氏より、「小/大」と「深煎り(する)」における「深」や「遠回り(する)」における「遠」のような要素との類似性について指摘を受けた。「深煎り」は結果修飾解釈、またたとえば「早歩き」なら様態修飾解釈と言えそうであり、本稿で提案した統語的分析を適用することが可能ではないかと考えている。この問題について考えるには、「陰干し(する)」などの名詞が複合するパターンとの関連や、「小/大」のような接頭辞と「深」や「遠」などの形容詞の語幹部分との形態論的性質の異同も考慮に入れる必要がある。
- また、同氏より「記述的二次述部 (depictive secondary predicate)」（例：裸足で走った）の分析の可能性についても指摘を受けた。記述的二次述部が意味的には様態修飾的であることを考えると、本稿で提示している Root 仮説を用いた分析との関連がうかがえるが、記述的二次述部は内項だけでなく外項の状態を叙述することもできるため、内項しか叙述できない結果二次述部とはその統語的性質が大きく異なる可能性がある。これは「様態」や「状態」といったものを統語的に取り扱うアプローチにとっては大きな問題であり、単純に別扱いとするのではなく、合わせて研究を進めたい。
- 17 Acquaviva (2009) が仮定するように、限りなく Root 自身が持つ内容を減らす方向性が理想であると考えられるが、この点についてはいくつかの提案があり、決着には至っていない (Embick and Noyer (2007), Embick (2012), Harley (2014))。
- 18 BECOME や CAUSE といった状態変化に関わる操作子 (operator) に c-command される場合は state になる、といった形での分析も考えられる。